

試験區別	上等		中等		下等		總收量	
	個數	重量	個數	重量	個數	重量	個數	重量
標準區	三三	二,二〇八	三三	二,三三七	一〇	〇,五〇八	七三	五,〇五二
磷酸倍量區	二七	一,二二五	九七	三,五七九	一〇	〇,一八三	一三四	四,九七七
加里倍量區	四〇	二,八五〇	一五	一,〇一〇	—	—	五五	三,四六〇

追肥施用時期比較試驗

目的 追肥施用時期と果實肥大の程度并に樹の發育伸長と如何なる關係なるやを知らんとするにあり

供試樹 四十三年四月居接澁大柿各二本

樹形 盆狀

樹間距離 方十二尺

試験區別 標準區(一回施肥)

一樹の收量表を示せば次の如し

試験區別	上等		中等		下等		總收量	
	個數	重量	個數	重量	個數	重量	個數	重量
標準區	三三	二,二〇八	三三	二,三三七	—	—	七三	五,〇五二
七月下旬追肥區	二六	六,九〇三	一七	〇,九一三	—	—	一三三	七,八一五
八月中旬追肥區	四五	二,八四〇	一一	〇,八〇〇	—	—	五七	二,六四〇

九月上旬追肥區

八六

五,六八五

三三

一,三〇〇

—

—

一〇八

六,九八五

柑橘品種試験

目的 本縣に適當し且つ有望と認むべき品種を撰擇せんがため左記品種の栽培をなす

一、早生温州
二、尾張温州
三、ワシントンネーブルオレンジ
四、タムソンネーブルオレンジ
五、紫甜橙
六、グレートネーブルオレンジ
七、ナベレンシヤ
八、新夏橙
九、セントミケール
十、三寶柑
十一、パレンシヤレート
十二、夏橙
十三、ジョツパオレンヂ
十四、旭柑
十五、マルチースプラッド
十六、ルビーブラッド
十七、支那福橘
十八、暹羅柑

温州密柑窒素肥料種類試験

目的 密柑栽培上支出の大部分を占むるものは肥料費なり故に肥料の合理且つ經濟的に施用する必要あるを以て本試験を行なふものとす

供試樹 四年生尾張温州密柑各十本宛

樹間距離 方十二尺

試験區別	肥料名		及用		對一樹		價格		
	堆肥	鯨糞粕	綿實粕油	大豆粕	骨粉	木灰		全窒素量	全磷酸量
鯨糞粕區	〇,〇〇〇	〇,三〇九	—	—	〇,〇九三	〇,四〇〇	〇,〇三五	〇,〇三五	〇,〇三五

綿實油粕區	2,000	0.80	0.35	0.13	0.03	0.03	0.03	0.13	0.13
大豆粕區	2,000	0.80	0.35	0.13	0.03	0.03	0.03	0.13	0.13

其の成績次表の如し(對一樹の收量)

試驗區別	上等		中等		下等		總收量	
	個數	重量	個數	重量	個數	重量	個數	重量
鯀粕區	27	0.79	20	0.04	5	0.08	34	0.92
綿實油粕區	19	0.42	3	0.06	3	0.04	26	0.56
大豆粕區	11	0.36	3	0.00	1	0.03	15	0.40

第二

試驗區別	着色歩合 (採收當時調査) %		四月下旬調査	
	着色尤も良きもの	中庸のもの	色澤の良	否
鯀粕區	0.25	0.55	濃色なれども光澤尤も不良	
綿實油粕區	0.14	0.06	濃色なれども光澤なし	
大豆粕區	0.14	0.03	淡色なれども光澤尤も良	

第三

試驗區別	香味	採收當時の四月下旬
鯀粕區	甘味第一	位
綿實油粕區	甘味第二	位
大豆粕區	甘味第三	位

鯀粕區	甘味第一	位
綿實油粕區	甘味第二	位
大豆粕區	甘味第三	位

以上は單に一ヶ年の成績なれば今後續行したる後確報せんとす

温州密柑施肥回数試験

目的 一回に全肥料を施用すると二回に分肥するとは樹の發育結果并に果實の成熟上如何なる關係あるやを知らんとするにあり

供試樹 四年生尾張温州密柑各十本宛

樹間距離 方十二尺

試驗區別 四月上旬一回施肥區

四月上旬及七月中旬の二回に分施肥區

成績第一 對一樹收量

試驗區別	上等		中等		下等		總收量	
	個數	重量	個數	重量	個數	重量	個數	重量
一回施肥區	110	0.36	0.35	0.00	15	0.03	125	0.39
二回分施肥區	207	0.89	0.70	0.11	18	0.01	225	0.93

成績第二 採收當時の着色歩合

試驗區別	色澤尤も良きもの%	中庸なるもの	劣悪なるもの
一回回施肥區	0.149	0.250	0.111
二回回施肥區	0.101	0.150	0.156

窒素質肥料交換試験

目的 密柑栽培上々々窒素質肥料を交換すると連年同一肥料を用ふるとは收量并に樹の發育上如何なる關係あるやを知らんとするにあり

供試樹 四年生尾張温州密柑各五本宛
樹間距離 方十二尺

試驗區別 大豆粕と綿實油粕との交換區
成績第一 對一樹の收量 連年大豆粕區

試驗區別	上	中	下	總收量
	個數	個數	個數	個數
交換區	110	115	110	335
	重量	重量	重量	重量
全一區	0.3635	0.0025	0.0037	0.5697
	0.3635	0.0025	0.0037	0.5697

成績第二 果皮の色澤調査

採收當時の調査%	四月下旬調査		
上	中	下	色澤の良否

交換區 0.149 0.250 0.111 0.3635 0.0025 0.0037 0.5697

全一區 0.111 0.250 0.3635 0.5697

稍々濃色なるも光澤なし
淡色なるも光澤あり

石灰施用量試験

目的 密柑栽培上石灰を施用せば品質收量に如何なる影響を及ぼすものなるや及其適當なる用量を知らんとするにあり

供試樹 四年生尾張温州密柑各五本宛
樹間距離 方十二尺

試驗區別 標準區(不施用) 反當十貫區 反當十五貫區 反當二十貫區
施用方法 各區共施肥後三十日を経たる時即四月下旬圃場の全面に撒布し極めて淺く表土と混じ置きたり

成績第一 對一樹の收量

試驗區別	上	中	下	總收量
	個數	個數	個數	個數
標準區	110	110	110	330
	重量	重量	重量	重量
十貫區	264	100	40	364
	0.9030	0.0085	0.0060	0.9175
十五貫區	153	100	80	333
	0.4683	0.0160	0.0110	0.4953
二十貫區	115	30	1	146
	0.2583	0.0050	0.0110	0.2743

成績第二 色澤調査

試験區別	採收當時の調査%		四月下旬調査位
	上	中	
標準區	0.111	0.606	0.283
十貫區	0.177	0.470	0.211
十五貫區	0.265	0.375	0.359
二十貫區	0.411	0.281	0.447
色澤の良否	極めて淡色		順
順位	中上		位

成績第三

試験區別	採收當時の順位	
	四月下旬	四月下旬
標準區	第4位	第2位
十貫區	第3位	第1位
十五貫區	第2位	第3位
二十貫區	第1位	第4位

以上は單に一ヶ年の成績に過ぎざるを以て尙試験を續行したる後確報せんとす

苹果、李、枇杷、葡萄品種試験

本縣に適當し且つ有望と認むべき品種を撰擇せんがため左記品種に栽培せり

苹果

クーパーズアーリー

テトホスキ

紅魁

エーロートラムスメーレント

祝

鶴の卵

鳳凰卵

旭

李

ドーラン

メーナルド

寺田李

甚三桃

櫻島米桃

市成李

枇杷

茂木

佐々木白

田中丸

田中長

廿七奴

田中

清國

清國大圓

寒

唐

早生

田邊

土肥

葡萄

アイプス

カールマン

グリーンマウンテン

アチロンダック

セツシカ

ブライトン

ハイランド

ハイパー

ベリー

レディーワシントン

チャムピオン

ムーアースダイアモンド

ハートフォードプロリフキウク

ミルス

アーリーオハイカ

カムベルスアーリー

コンコード

ガパナールツス

カンベル

ハーベモッド

プレコリス

ダイアナ

ブラックアリアカント

クリントン

グロウギューム

アガワーム

マスカットオブレキサンドリア

ホワイトマラガ

ブラックパーガンディ

ギンファンデル

パイプルダマスカス
 ビノノアール
 パレストイン
 プラックハンバード
 ホルディーノアール
 シヤスラノドオアブオシテレプト
 長野白

ビノノプラン
 ビノノグリー
 シヤボノ
 アレコースドマラング
 フオスターシードリング
 レエアザゴス
 長野赤

グロコールマン
 マラガマスカタラ
 マタロ
 プラックマスカテラ
 トムソンシードレッツ
 甲州
 (以上)

果樹種苗配布

苗木 六百四十一本 百九十三人
 接穂 二千一百二十六本 七十五人

郡農會
 縣試驗場
 縣農講

苗木拂下 一百二十五本 三人

柑橘銹壁蝨驅除試驗

一、目的 近年銹壁蝨の柑果に被害を及ぼすの程度漸次多きを加へ將來之が驅除豫防を緩にすべからざるを以て左の方法に據り之が試験を施行せり

一、供試樹 温州密柑樹前年銹壁蝨發生樹各區一本宛

一、試驗施行期日 發芽前一回のもの及其後五日を経て一回計二回撒布のもの
 落花後一回のもの及其後五日を経て一回計二回撒布のもの

一、供試劑 發芽前試用のもの

石灰硫黃合劑ホーメー比重 ○、五度 ○、七度 一、〇度 一、二〇度 三、〇度

硫黃苛性曹達合劑硫黃華五百匁 苛性曹達二百五十匁 水一斗原液

二十倍 三十倍 四十倍 五十倍 六十倍 七十倍

石鹼硫黃合劑

石鹼 三匁 五匁 二匁 二匁

硫黃華 二匁 一匁 二匁 一匁

清水 一升 一升 一升 一升

落花後試用のもの 石灰硫黃合劑ホーメー比重 ○、四度 ○、五度 ○、七度 一、〇度

硫黃苛性曹達合劑硫黃華五百匁 苛性曹達二百五十匁 水一斗原液

三十倍 四十倍 五十倍 六十倍 七十倍 八十倍

石鹼硫黃合劑

石鹼 五匁 二匁 二匁

硫黃華 一匁 二匁 一匁

清水 一升 一升 一升

藥劑名	濃度	撒布期日	撒布回数	成蹟 (百分率)	藥劑名	濃度	撒布期日	撒布回数	成蹟 (百分率)
水石硫 黃 驗華	一升 二升 三升	四月五日	一回	全	水石硫 黃 驗華	一升	六月十日	一回	全
水石硫 黃 驗華	一升 二升 三升	四月五日	一回	全	水石硫 黃 驗華	一升	六月十日	一回	全
水石硫 黃 驗華	一升 二升 三升	四月五日	一回	全	水石硫 黃 驗華	一升	六月十日	一回	全
水石硫 黃 驗華	一升 二升 三升	四月五日	一回	全	水石硫 黃 驗華	一升	六月十日	一回	全

十一月十三日採收前に於ける調査の結果左の如し

藥劑名	濃度	撒布期日	撒布回数	成蹟 (百分率)	藥劑名	濃度	撒布期日	撒布回数	成蹟 (百分率)
石灰硫黃合劑	〇.五 〇.七 一.〇 二.〇 三.〇	四月五日	一回	五分被害果の被害の程度尤甚し 九割激甚	石灰硫黃合劑	〇.四 〇.五 〇.七 一.〇	六月十三日	一回	六分七厘
石灰硫黃合劑	〇.五 〇.七 一.〇 二.〇 三.〇	四月五日	一回	二分四厘	石灰硫黃合劑	〇.四 〇.五 〇.七 一.〇	六月十三日	一回	一分一厘
石灰硫黃合劑	〇.五 〇.七 一.〇 二.〇 三.〇	四月五日	一回	二分一厘	石灰硫黃合劑	〇.四 〇.五 〇.七 一.〇	六月十三日	一回	無被害
石灰硫黃合劑	〇.五 〇.七 一.〇 二.〇 三.〇	四月五日	一回	一分五厘被害果は被害極めて輕	石灰硫黃合劑	〇.四 〇.五 〇.七 一.〇	六月十三日	一回	無被害

標準區二分弱の被害あり

藥劑名	濃度	撒布期日	撒布回数	成蹟 (百分率)	藥劑名	濃度	撒布期日	撒布回数	成蹟 (百分率)
石灰硫黃合劑	〇.五 〇.七 一.〇 二.〇 三.〇	四月五日	一回	一分四厘被害果の過半は被害激甚	石灰硫黃合劑	〇.四 〇.五 〇.七 一.〇	六月十三日	一回	三分被害果は輕微
石灰硫黃合劑	〇.五 〇.七 一.〇 二.〇 三.〇	四月五日	一回	無被害	石灰硫黃合劑	〇.四 〇.五 〇.七 一.〇	六月十三日	一回	四分四厘被害果の過半は局部激
石灰硫黃合劑	〇.五 〇.七 一.〇 二.〇 三.〇	四月五日	一回	三分二厘被害果の七割は被害激甚	石灰硫黃合劑	〇.四 〇.五 〇.七 一.〇	六月十三日	一回	三分九厘被害果の過半は激甚なるものにて占む
石灰硫黃合劑	〇.五 〇.七 一.〇 二.〇 三.〇	四月五日	一回	一分二厘被害果の被害の程度極めて輕微にして認識し難し	石灰硫黃合劑	〇.四 〇.五 〇.七 一.〇	六月十三日	一回	無被害
石灰硫黃合劑	〇.五 〇.七 一.〇 二.〇 三.〇	四月五日	一回	四厘被害果局部は極めて輕微	石灰硫黃合劑	〇.四 〇.五 〇.七 一.〇	六月十三日	一回	無被害

赤壁蝨驅除試験及其成績

一、目的 四月一日左記各種驅虫劑を以て赤壁蝨に對する効力比較並に何れの合劑が尤も經濟的なるやを試験せり

一、供試樹 五年生温州密柑 一區一本宛

一、供試劑 鯨油石鹼 松脂苛性曹達合劑

石灰硫黃合劑

硫黃苛性曹達合劑

一、調査月日 四月二日降雨に先ち調査す

藥劑名	用	量	稀釋	釋量	價	格	成	蹟
鯨油	石鹼	四	水	一	六	厘	殆ん	生存
鯨油	石鹼	五	水	一	七	厘	殆ん	生存
鯨油	石鹼	六	水	一	九	厘	全	死す
鯨油	石鹼	八	水	一	壹	圓	全	死す
鯨油	石鹼	十	水	一	貳	圓	全	死す
鯨油	石鹼	十五	水	一	參	圓	全	死す
松脂苛性曹達合劑		十	水	一	壹	圓	殆ん	生存

松脂

十

勿

十

勿

水

一

升

壹

錢

五

厘

殆ん

生存

存

石灰硫黃合劑三十三度のもの

濃度	稀釋	釋量	價	格	成	蹟
三、	水	一	壹	圓	全	死す
二、	水	一	壹	圓	全	死す
一、	水	一	六	圓	全	死す
〇、	水	一	參	圓	極めて	僅に死す
五度	水	一	參	圓	僅に	死す
十度	水	一	貳	圓	全	死す
十五度	水	一	壹	圓	全	死す
廿度	水	一	參	圓	全	死す
廿五度	水	一	參	圓	全	死す
卅度	水	一	四	圓	全	死す

硫黃苛性曹達合劑
硫黃華五百勿水一斗
 苛性曹達二百五十勿

濃

十

十

十

十

倍

倍

倍

倍

倍

稀釋

液

一

升

壹

圓

六

毛

全

全

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

以上の成績に依れば石灰硫黄合剤一度液至廉にして驅虫の効大に硫黄曹達合剤は調製稍多くの勞力を要するも第二位を占め鯨油石鹼之に次ぎ松脂苛性曹達合剤の適用は尤も不利益なるを示せり

梨及桃桑介殼虫驅除劑種類試驗

前年に引續き試驗續行し尚ほ新藥劑を用ひたる試驗効果及び藥劑左の如し

一、魚油木灰汁合劑	〔魚油二合五勺 水一升 濃灰汁三十勺〕
一、苛性加里液	A 〔苛性加里十二勺 水六合〕 B 〔苛性加里十二勺 水五合〕
一、鯨油液	A 〔鯨油十五勺 水二合五勺〕 B 〔鯨油七勺 水一合五勺〕 C 〔鯨油二十勺 水四升〕
一、石腦石鹼合劑	〔石腦油三合 水一升二合 軟石鹼六合餘〕
一、コキレット合劑	〔石灰二貫百二十八勺 食鹽七百九十八勺 水五斗五升 硫黄一貫六十四勺 苛性加里百七勺〕
一、木灰蕃菽合劑	〔濃灰汁二合五勺 原液及三倍液 蕃菽二勺五分〕
一、蕃菽加用石油乳劑	〔蕃菽四十勺 石油一升 石鹼十三勺 原液 三倍液〕
一、石灰乳	
一、輕灰	
一、灰	

一、石腦石鹼合劑	〔石腦油水適宜 軟石鹼 三倍液〕			
一、重油乳劑	〔重油一升 水五合 石鹼二十四勺 食鹽五勺〕	原液	三倍液	
一、鯨油食鹽木灰汁合劑	〔木灰汁三合 食鹽五勺 鯨油五勺〕	原液	三倍液	
一、除虫菊消石灰合劑	〔除虫菊三勺 消石灰十五勺〕			
一、木灰石灰汁	A 〔木灰五百勺 石油乳劑の半分嫩の價格 生石灰五百勺〕 B 〔木灰三百勺 全上劑の三倍液と全價 生石灰五百勺〕 C 〔木灰二百勺 全上劑の二倍液の半分と全價 生石灰三百勺〕			

右撒注の結果左の如し

藥劑名	稀釋數	結	果
魚油木灰汁合劑	原液	二月二十一日調査	三月十八日
苛性加里液	A 原液	梨桃 全三割	梨桃 全四割
苛性加里液	B 原液	梨桃 全三割	梨桃 全四割
苛性加里液	C 原液	梨桃 全三割	梨桃 全四割

上述の成績を得たるに依り其の効果の顯著なるものに就き更に該薬品の用量の増減を行ひ再び試験を施行せり其結果次の如し(但し供試樹桃樹のみ)

重油乳劑	鯨油食塩木灰汁合劑	鯨油食塩木灰汁合劑	除虫菊硝石灰合劑	木灰石灰汁	木灰石灰汁	木灰石灰汁	濃度石灰硫黄合劑	酸曹殺菌虫劑	酸曹殺菌虫劑
原	原	三	原	A	B	C	原	二	四
液	液	液	液				液	液	液
梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃
全	全	全	四	二	一	一	全	六	一
全	全	全	割	割	割	割	割	割	割
死	死	死	死	死	死	死	死	死	死
全	全	全	生	一	一	生	全	生	一
全	全	全	割	割	割	割	割	割	割
全	全	全	生	生	生	生	生	生	生
死	死	死	存	存	存	存	存	存	存

鯨油	鯨油	鯨油	石腦石鹼合劑	石腦石鹼合劑	コキレット合劑	木灰蕃菽合劑	蕃菽加用石油乳劑	蕃菽加用石油乳劑	石灰	輕灰	石灰	石腦石鹼合劑
A	B	C	原	原	原	原	原	原	三	三	三	三
液	液	液	液	液	液	液	液	液	液	液	液	液
梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃	梨桃
全	全	全	一	一	一	二	二	三	七	四	一	一
生	生	生	割	割	割	割	割	割	割	割	割	割
死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死
全	全	全	生	生	生	生	生	生	生	生	生	生
生	生	生	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部
生	生	生	生	生	生	生	生	生	生	生	生	生
存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存

紙質名及塗抹材料	袋掛當 時の數	完全袋數	被害袋 別	小計	成績 百分率	備考
硫酸紙無底	八十枚	二十九枚	一、四十二枚 二、七枚	四十七枚	五割三分	二ツ全ク芽蟲及債避 虫ノ加害ニ係ル
硫酸紙有底荏油塗抹	百枚	四十二枚	一、九枚 二、三十一枚 三、三十一枚	五十八枚	九分	
全上有底澁塗抹	百五十枚	六十五枚	一、五十三枚 二、四十九枚 三、五十九枚	百十六枚	三割五分	
片つや模造紙	百五十枚	五十六枚	一、二十九枚 二、二十九枚 三、四枚	九十四枚	一割七分	
全上紙澁塗抹	百枚	二十三枚	一、二十枚 二、三枚 三、七枚	六十二枚	二割	
全上紙荏油塗抹	百五十枚	九十九枚	一、二十二枚 二、二十二枚 三、七枚	五十一枚	八分	
生涯古反紙	七十枚	ナシ	一、二十七枚 二、三枚 三、三十枚	六十枚	三割八分	
生涯反古紙澁塗抹	二百枚	四十一枚	一、六十二枚 二、二十八枚 三、五十三枚	百四十三枚	三割一分	

反古紙無底	五十枚	ナシ	一、二十七枚 二、三枚 三、二十枚	五十枚	五割四分	七月十一日ニ至リ袋 ハ大部分破レ果實ハ 露出ス
反古紙無底澁塗抹	五十五枚	一枚	一、十二枚 二、十五枚 三、二十七枚	五十四枚	二割二分	
官報用紙	八十枚	十一枚	一、三十枚 二、二十一枚 三、二十八枚	六十九枚	三割九分	落下ノ内ニハ果實ノ 袋内ニテ腐敗セシモ ノチモ含有セリ
官報用紙澁塗抹	百枚	四十二枚	一、二十三枚 二、十八枚 三、二十七枚	五十八枚	二割三分	機械的破損ノタメ虫 害ヲ受ケタルモノ之 チ二ノ部ニ編入ス
新聞紙有底荏油塗抹	百枚	二十八枚	一、十二枚 二、二十五枚 三、二枚	七十二枚	一割二分	
全上無底澁塗抹	四十枚	十枚	一、四枚 二、四枚 三、二枚	三十枚	一割	
八ッ切新聞紙有底(赤紙)	八十枚	三十一枚	一、十四枚 二、十三枚 三、十三枚	四十九枚	一割八分	
八ッ切新聞紙有底(白紙)	百枚	四十七枚	一、二十三枚 二、二十三枚 三、二十六枚	五十三枚	二割三分	

以上の成績に依れば有底袋は常に無底袋より果蠹虫の侵害歩合少く塗抹材料を用ひしものは然らざるもの

に勝れり各紙中片つや模造紙大体に於て成蹟良好にして荏油塗抹區は尤優秀の成績を示せり硫酸紙佳油塗抹及新聞紙澁塗抹之に次ぐ硫酸紙澁塗抹の成績不良なるは塗抹物のため紙質硬化し風雨等のために樹梢に觸れ破損したるもの多きのみならず袋掛當時既に紙質硬化せるがため袋の結絡容易ならざりしため果蠹虫の侵入をして容易ならしめたるならん

毒劑撒布試驗成績

(大正三年度)

第一區	亞砒酸鉛	二十七匁	第二區	亞砒酸鉛	三十六匁
第三區	亞砒酸鉛	四十五匁	第四區	パリスクリン	十二匁
第五區	パリスクリン	九匁	第六區	パリスクリン	十五匁

以上の各劑をホルドウ液三斗五升式に溶解し四月十五日晴天を撰び第一回の撒布を行なふ
四月十六日調査(撒布後十五時間經過の後)

- 第一區 體長一分餘に達する星蝸蝓生存其他効果なし(但し僅に食食せるのみ)
 - 第二區 全上
 - 第三區 全上
 - 第四區 體長一分五厘の芽虫生存蟄居せるのみ
 - 第五區 判然せず
 - 第六區 體長二分に達する星蝸蝓尚ほ生存極めて僅かに食食せるのみ
- 四月二十一日調査
- 第一區のみ開展せる葉面黒枯卷縮すると甚だしく非常なる害ありき、時に葉は一寸以上に開展せし頃なりき

第二區僅少なりしかども第一區全様の被害ありき、他區は無害なりき

備考、第一區の被害甚大なりし樹は獨逸種にして發育大に進捗せるを以てなるべし、他區は第二區を除くの外殆んど巻葉の状態なりき

四月二十五日調査

- 第一區 害虫生存
 - 第二區 害虫生存
 - 第三區 害虫生存
 - 第四區 一分平方食食せる避債虫死せず
 - 第五區 効力あるものゝ如し何れの害虫も棲息せず
 - 第六區 三分に達する芽虫生存せるも避債虫死せり
- 第二回撒布、五月八日施行晴天午後五時着手五時半終了
供試樹各劑濃度共悉く第一回に準じ之れを行ふ
五月九日各劑撒布區々に星蝸蝓又は避債虫芽虫等を二三頭添付す
五月十日調査
- 第一區 體長五分の星蝸蝓四分平方を食食せるも生存す
 - 第二區 體長四分餘のもの八分平方を、同體長のもの五分平方を食するも其効なし
 - 第三區 直徑一寸餘の葉を悉く食盡毒死す
 - 第四區 體長四分の星蝸蝓二分平方を食食せるも生存せり、然れども無藥布區の如く食食せず
 - 第五區 體長四分の星蝸蝓四分に達する全虫三分平方を食食せるも皆生存せり
 - 第六區 體長五分に達する星蝸蝓一分餘を食食せるも生存

五月十一日夕 より十二日に亘り降雨あり
五月十九日調査

第二區 生存せるも僅かに成長せるのみ殆んど瀕死の状態にあり

第三區 全く成長せず脱皮するに及んで半脱皮をなせるのみ

第一區 加害葉全部をカシワ状に纏ふの力を失し僅かに葉の先端部に於てのみ纏ひ生命を保つのみ全く發育せざるものもあり

第四區 體長五分に達する葉巻四分弱平方を食し斃死す

第五區 僅に成長せるのみ然れども食害部極めて少部分なり、或るものは僅かに生命を保持せるに止まる

第六區 星蝨蠹蝨虫共に葉上に毒死す果蠹虫のため侵入せらるゝ數は無撒布區と大いに異なる所なり備考、十九日迄に二日半日間の降雨ありき

五月二十三日調査

五月廿日に暴風雨あり葉捲星蝨蠹蝨等の諸害虫行方衛不明となりしが故に他區は判然せざるも第一區三分餘の星蝨蠹蝨死せり

七月二日第一區は全葉悉く黄變落葉せり、其後第二區も第一區と全様の被害ありしも極めて僅少なりき、要するに初回の撒布が葉の餘り開展せし後なりしに基因せるものなるべし

以上の結果を見るに其の成績の多くは害虫をして撲滅し得るの力なく漸やくして之が成長を防止し得るに止まれりと雖も第三區第六區は其効確實なるを認めたり

梨姫心喰の経過習性

凡そ果樹を加害する害虫の數極めて多く加害の狀自ら異態輕重ありと雖就中該虫は桃柿等多くの果樹殊に果實を喰害し其の損害決して少なしとせず故に該虫の経過習性を明にし以て驅除豫防の資に供せんとして飼育を行へり

幼虫、蛹化したる幼虫は約廿日内外を以て蛹化する老熟するものは體長四分に達す圓筒形にして褐色に多少紅色を帯び頭部は茶褐色にして全体に短毛を疎生す

蛹化期に及べば幼虫は技幹の粗皮殊にるり天牛被害木屑露出部の木屑を或は春季にありては鱗片を纏絡、絲縷を吐き技條の又の部又は外皮の粗糙なる個所に粗繭を營み蛹化する

蛹は一分二厘内外にして茶褐色を呈すると雖も羽化期に近けば黒色となる蛹期は四五にして蛾化するに至る

成虫は小形の蛾にして頭胸は灰黒腹部は淡灰色なり前翅光輝ある灰黒色を帯び外縁部は淡色にして黒條及細微の黒點を横列す後翅は淡茶褐色にして斑點を缺き後縁に至るに従ひ長き縁毛を備ふ體長一分五厘翅の開張四分あり性活潑にして巧に波行狀に飛揚す而して強剛なるものは二十日内外の長きに至る生命を保持せり卵極めて少く隨圓形の滑澤ある褐色を呈す果實新芽嫩葉等に一個づゝ産付せらる産卵後一週間内外にして孵化す

以上は七月七日體長二分五厘に達する幼虫採取飼育を開始したる場合に於ける経過にしてこは野外に於ける第一回發生なるべく而して此飼育せしものと八月中旬乃至九月初中旬に第三回の發生をなし果實に蠶入高るものは完全なる發育をなすを雖果實を喰害し得ざりしものは嫩梢木質部を蠶入喰害するも發育前者に劣り時として餓死するものもあり

老熟したる幼虫強健なるは咀嚼口を以て外皮木質を喰取し吐糸と共に營繭し之に蟄して冬季を越す其後の経過に就ては未だ詳細なる調査をなされば茲に明記し難きも飼育を繼續追て發表すべし

茶業講習之部

果樹

之に依て是と見れば冬季石油乳剤石灰燻殺剤の撒布は其効尤も顯著なるべく營繕化蛹向季に蟻蝨等を與へ之に誘殺捕殺するも亦其効大なるべく樹梢の清潔を保たしむるは大に預防の効あるべし

茶業講習部

主任技手 奥中治郎松

本講習は大正元年の創設に係り其目的とする所は茶業技術員の養成を主とし併せて茶業に関する各種の試験を行ふにあり今大正三年の梗概を記述せば左の如し

◎ 講 習

一、期間 五月一日より全卅一日迄一ヶ月間

(イ)學 科

五月二日より六日迄と全廿八日午後より三十日迄の二回に分ちて教授せり

(ロ)講 師

茶業組合中央會議所大林技師、中村場長、青木技師、奥中技手、伊藤技手
尙科外教授として大平技手の講演を乞ひたり

(ハ)課 目

茶業汎論、製茶論、茶樹栽培、茶樹病虫害、茶業に関する法規、製茶審査法、着色茶鑑定法、土壤肥料等の大綱を講演筆記せしめたり

(ニ)實 習

五月七日より全廿八日迄とす

(ホ)實習方法

伊藤技手を主任とし教師森本卯吉、東喜太郎をして各其特技に就て分擔せしめ生葉の取扱より茶葉の

蒸方、諸器具の取扱方法、製茶器械使用法、手揉及器械製茶法の一斑、審査實習着色茶鑑定法、篩分精製法等生徒をして連日交代練習せしめたり尙ほ製茶法は練習揉、時間揉、多量製造等に分ちて傳習し各自の製品は見本を徴して審査實習用となし後日全生徒に採点せしめて其都度審査批評をなし練習せしめたり

篩分精製法に就ては一定の原茶を與へ篩切精製中に於ける種別を筆記せしめ尙ほ原茶の價格を示して精製後の價格と比較して其利益を知らしむる等殆んど茶業全般に亘りて遺憾なきを得たり
更に講習中實地見學の爲め生徒一同を引卒して京都府下宇治、木幡、伏見等著名の産地を視察して茶業熱心家に就き製茶法の見學をなさしめたり

二、製茶量

講習中製造に供したる茶葉量は三百九十貫六百匁にして製茶七十七貫六百匁を得たり此製茶を生徒の實習用となし精製品は参考品として縣下各郡市當業者及他府縣の關係公衙に配付し殘品は賣却せり

三、生徒數

入所を許可したるもの 二十名

内 欠席者 四名

修業者 十六名

試驗

◎種子撰別試驗

本事業は大正元年よりの繼續事業にして種子の良否が生育上如何なる關係を有するやを講究する目的なるが其後の成績左の如し

第二年度成績

(大正二年十一月十九日調査)

區別	地上の伸長度		附記
	最大	最小	
大粒區	一、七四	〇、四一	成育均一にして樹勢旺盛なり
小粒區	一、一四	〇、三二	成育不整にして樹勢弱きを認む
一類一粒區	一、八七	〇、三四	生育稍や良好なるも樹勢旺盛ならず

概観

大豆粒區は樹勢均一にして横枝の發生を見るも小粒區は伸鈍長く一類一粒區は横枝少く樹の徒長する感あり

第三年度成績

(大正三年十一月一日調査)

區別	伸長調査		附記
	大粒區	小粒區	
大粒區	一尺七寸八分	茶樹中庸二十一株に付測定し平均したるもの	
小粒區	九寸三分	茶樹十株に付前法により調査	
一類一粒區	一尺六寸九分	茶樹二十三株に付前法により調査	

概観

第一區は伸長の度良好にして株張最も良しく一見團形をなすに至る

第二區は生育不良にして株張亦良好ならず

第三區は伸長良好なるも株張疎にして横枝少きを認む

調査

茶樹ノ撰伐後ニ於ケル生育状況調査

一、目的 本縣内に於ける茶樹の仕立方は到る所樹幹叢生し之れが爲め發育を阻害せらるゝ感あるを以て現在の茶園として冗枝撰伐の實行を奨励せん爲め本調査を行へり

二、場所 添上郡東市村大字古市宇油山本場茶園

三、撰伐期 明治四十五年二月十六日

四、樹齡 三十年生位

五、一株の幹數 三十五本乃至五十本

六、撰伐 主幹を十四本乃至十本とす

◎成蹟

第一年の生育状況

一、一番茶の發育普通園に比し二三日早かりし

二、一番茶摘採後生育不良

三、秋芽の伸長不良

四、開花多し

第二年目の生育状況

一、一番茶の發芽普通園に比し三日早し

二、夏芽の生育良好ならず

三、秋芽の伸長稍や不良

四、開花多し

第三年目の生育状況

一、一番茶の發芽普通のものより一整に早し

二、夏芽の生育稍や良好となる

三、秋芽の伸長良好にして普通末撰伐の園に比し稍や優位を占む

四、開花少なし

備考

本園は一時荒廢したるものを復興せし爲全園共二番芽の摘採を行はす

概観

以上の成績によれば茶園の冗枝撰伐は一時生育不良を見ることあるも年を逐ふて恢復の傾向を呈するや明なり然らば現在の茶園に於ては可成冗枝の撰伐を行ひ兩三年の後或る一定の幹枝に限定するは最も策の得たるものにあらざるか更に今後の生育状況を調査報告する處あるべし

雜

之

部

雜之部

分析部業務工程報告

自大正三年四月至大正四年三月

肥料並土壤及試驗藥品分拆

定 量	試驗品場用	六 件	六 成 分
	肥料全	五 件	五 成 分
	肥料依頼	七十六件	百三十三成分
	土壤依頼	五 件	十五成分
鑑定	肥料依頼	十五件	
土壤酸の調査			
定 性	依 頼	二十五件	
定 量	依 頼	十七件	
土壤養分吸收力調査			
場 用		二十六件	

野鼠驅除成績

本場に於てチアス菌を培養し之れを各郡市に無償配布をなし驅除を施行せし反別等左の如し

雜

郡別	反別	蕎麥粉量	菌數
添上郡	一三六三〇三	一七、五四八	一七六
生駒郡	一五七九八二	一五、七二〇	一五一
山邊郡	五九八二〇	六、四八〇	六四
磯城郡	一五〇八、〇〇	一五、〇八〇	一五二
宇陀郡	五四、〇〇	—	六
高市郡	一、五〇〇〇	七、〇〇〇	七〇
北葛城郡	一、三三三、〇〇	一、二六五〇	一三三
南葛城郡	一、八八八、四七	一、一三〇〇	一一三
宇智郡	一一二、四〇	一七、三〇五	一七七
吉野郡	二二九、五〇	二、四〇〇	二八
奈良市	一〇〇、〇〇	一、六〇〇	一六
合計	一〇、四〇一、四一	—	九八〇

但し培養莖は「アリオン」にして一本五〇〇c.c.入とす

養鶏部

種卵拂下數及其人員

種類名	個數	人員
横班アリマウスロック	三百七十個	三十三人
單冠白色レックグホーン	二百三十個	二十一人

名古屋コーチマ	二百十六個	二十三人
單冠黒色ミノルカ	七十八個	十一人
ハフオーヒントマ	十五個	二人
計	九百九個	九十人

調査及び實驗事項

鶏の種類と餌料及糞の生産量との關係を調査せしむ未だ完結に至らず
 孵卵器の使用と去勢法の實驗を行ひたり孵卵器使用の結果は稍々良好なりと雖猶研究を要す去勢法は頗る
 良好の結果を得たるを以て更らに郡部に於て實地指導をなせり

蔬菜草花種苗配布量及其人員

蔬菜苗	約三千本	十七人
蔬菜種子	六百五十五袋	百三十一人
草花種子	二百三十一袋	三十三人

職員出張

管内	管外	延日數	延日數
八回	八回	四百四十二日	四百四十七日

右を事項別にすれば左の如し

事項	回数	延日數	事項	回数	延日數
農場長會議	一	一二	農事調查	一三	三七
農事講習講話	九六	三〇二	果樹栽培實地指導	一六	四三
病虫害驅除實地指導	七	一一	事務打合せ	八	一二
農事視察	九	二六	柑橘栽培地に於ける害蟲除試驗施行	一	一七
農產物審査	二〇	三八	鶏去勢術實地指導	一	七

印刷物發刊

左記印刷物を發刊し其普及の爲め關係官衙、公署學校、農事團體、農業篤志者に配布せり

- 農家必携 百三十九部
- 大正二年度業務功程報告(上) 五百部
- 大正二年度業務功程報告(下) 五百部
- 麥類に就ての調査 五百五十部
- 水稻調査成績 五百部
- 茶樹の栽培 五百部
- 肥料之榮 五百四十部

文書受發件數

受 一千五十件 發 二千百九十九件

質問應答件數

- 肥料に關する件 二十二件
- 養畜に關する件 十三件
- 果樹に關する件 二十三件
- 蔬菜に關する件 十八件
- 普通作物に關する件 二十五件
- 病虫害に關する件 二十八件
- 農具に關する件 九件
- 土壤に關する件 六件
- 計 百四十四件

參觀人員

大正三年内に當場を參觀し場員の案内を受けたる者左の如し

- 外國人 六
- 縣外人 三百七十八人
- 縣内人 四千四百三十三人
- 官吏 三百六十四人
- 農家 一千四百三十八人
- 青年會員 四百六十八人
- 軍人 二百一十一人

計 (學校生徒)

壹千八百十七人
四千八百十七人

大正三年度當場經常費豫算左の如し

農事試驗場費	四百一十一、六六三、〇〇〇
俸給	三百四十八、〇〇〇
技師給	二、六〇〇、〇〇〇
大場員給	二、〇八八、〇〇〇
雜給	三、五八一、〇〇〇
旅費	一、〇七三、〇〇〇
旅人給	百四十四、三九六、〇〇〇
黨費	六、一一二、〇〇〇
備品費	二、五四三、〇〇〇
備品費	二、五八〇、〇〇〇
消耗品費	八二〇、〇〇〇
圖書費	六〇、〇〇〇
印刷費	二二二、〇〇〇
印信費	一四二、〇〇〇
通運費	一〇三、七〇〇
賄費	五七、〇〇〇

肥料 五九九、八〇〇
 養畜費 二六六、〇〇〇
 雜費 二五、二二〇
 製茶講習費 八五一、〇〇〇
 雜費 三七〇、〇〇〇
 雜費 四二一、〇〇〇
 借地料 六〇、〇〇〇
 修繕費 六五、〇〇〇
 計 一一、七二八、〇〇〇

(大正四年五月一日現在)

職名	姓名
場長	中村鐵太郎
技師	青木國治
技手	海老瀬周
技手兼農業技手	奧中藤彌郎
技手兼農業技手	伊藤正吉
技手	野村正治
技手	中川慶實
技手	森田正義

麥

之

部

雜ノ部

助 履 書

手 記

喜 奧 窪

多 田 田

以 慶 吉
正 治

上 雄 郎 松

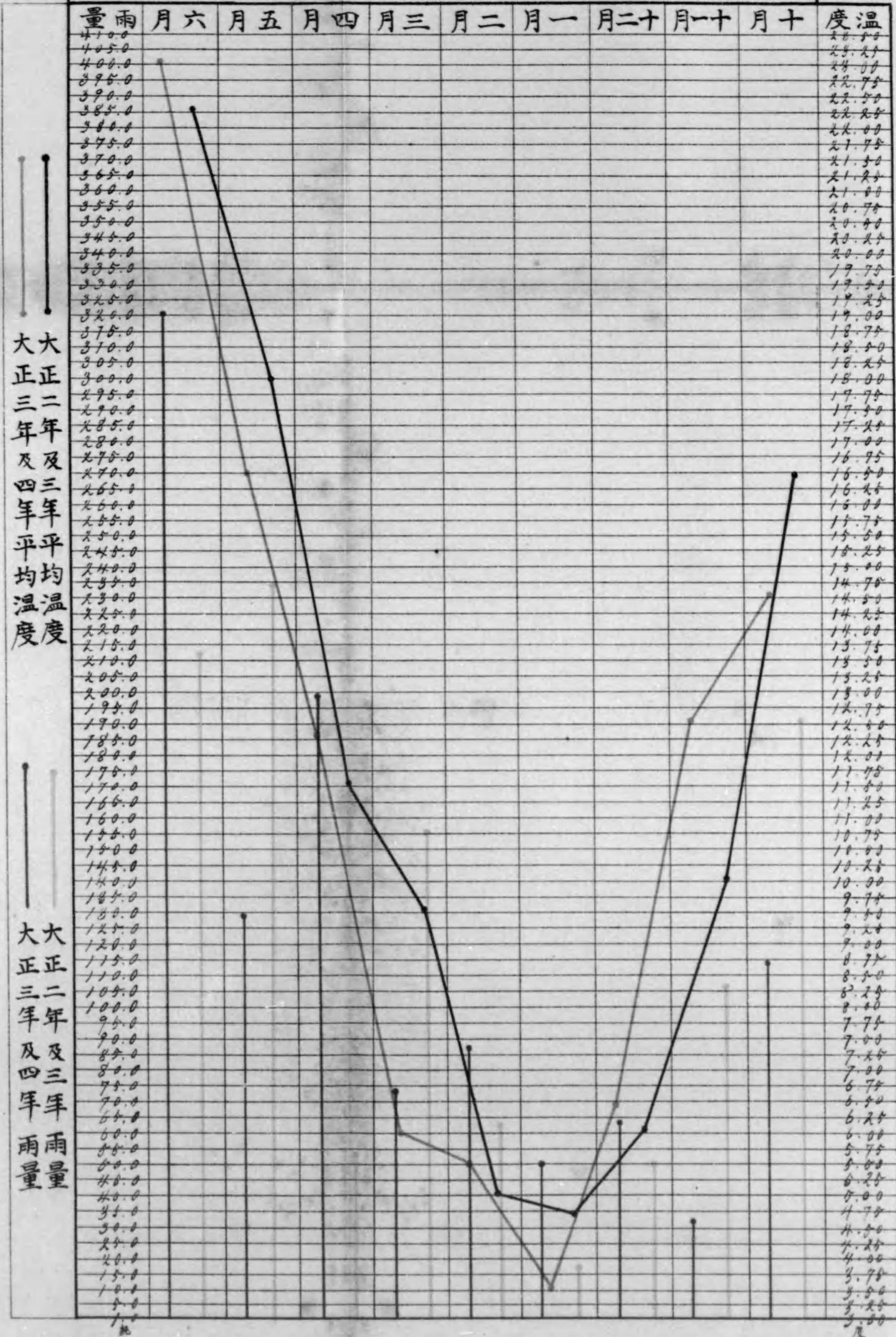
二六

冬作中の氣象大要

本年麥作期間中の氣候は之を前年に比すれば十二、一、二月に於て降雨日數、雨量共に多く十、十一、三、四、五、六の六ヶ月は降雨日數減少し從つて雨量減せりと雖四、六の兩月は孰れも百餘耗を増し全期間に於て日數に八日其量に於て十五耗二を減せり氣溫は十、一、三、五の四ヶ月は低く十一、十二、二、四、六の五ヶ月は稍高かりしも全期間に於て〇、三度低し
 今前年の氣候の大要と本年度とを對照せば左の如し

月	別	降雨日數	雨量	最高平均溫度	最低平均溫度	平均溫度
十月	大正二年	二	一九一	三三	一〇	一六
十一月	大正二年	九	一四二	二九	七	一四
十二月	大正二年	七	一〇六	二二	一	一〇
十一月	大正三年	一〇	三一一	一八	七	一三
十二月	大正三年	一〇	五〇二	一〇	〇	一六
十一月	大正三年	一三	六三七	一四	一	六
十二月	大正三年	一〇	一六五	一〇	〇	四
十一月	大正四年	一三	四九八	七	〇	三
十二月	大正四年	二	六三四	九	〇	五
十一月	大正四年	二	八七一	八	一	五

大正三年冬作



大正二年及三年平均温度
大正三年及四年平均温度

大正二年及三年雨量
大正三年及四年雨量



大正三年度冬作試験成績

種藝部主任技師 青木國治

甲、裸麥之部

圃場試験は特種の試験を除く外總て左の耕種法に依り栽培せり

- 一、供試品種 改良麥
- 一、選種 唐箕撰を行ひ更に篩別して小粒を除き比重一、二〇の苦楨汁にて撰種を行ふ
- 一、整地法 畦の中心となる可き位置を豫め耕し其上に堆肥を施用したる後畦造りをなし金鍬を以て土塊を碎き薄溝を切る
- 一、播種期 十二月一日より十二月三日に至る
- 一、播種量 一反歩四升
- 一、播種法 四尺五寸幅の畦に二條の蒔溝を切り之れに大豆粕過磷酸石灰を撒布し土を能く混和し人糞尿を施して播種し其の上に肥土を以て覆へり
- 一、肥料 一反歩に對する肥料の種類用量等は左の如し

肥料名	總用量	基肥	補肥			含有三成分	價格
			第一回	第二回	第三回		
堆肥	500 貫	500 貫	—	—	—	—	5,000 円
大豆粕	10 貫	10 貫	—	—	—	—	2,000 円
過磷酸石灰	5 貫	5 貫	—	—	—	—	500 円

裸麥

人糞尿	二〇〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	一、一四〇	二、六〇〇	五、四〇〇	二、〇〇〇
木灰	二〇〇	—	—	—	—	—	—	九、八〇〇	二、三〇〇	七、〇〇〇
合計	—	—	—	—	—	—	三、八四〇	二、九四〇	五、五七五	七、五五〇

一、補肥 人糞尿は第一回を一月下旬に第二回を三月下旬に木灰は二月下旬に施用せり
 一、中耕 第一回中耕は一月二十四日より一月三十一日迄第二回中耕は三月五日より三月十八日迄
 第三回中耕は三月二十日より二十五日迄第四回中耕は三月二十七日より四月三日迄に行へり
 一、除草及培土 四月上旬除草後根寄を行へり
 一、收穫乾燥及調製 黄熟の時晴天を下して刈り取り一、二日間田面にて乾し翌日扱落をなし更に蓆乾をなし充分乾燥せしめて調製をなせり

一、品種試験

本試験の目的は従來本場の成績により優良と認めたる六品種に就き各種適應の耕作を施し其特性を充分に發揮せしめ以て縣下の風土に適し且つ收量多く品質の良好なるものを見出さんとするにあり今其成績を示せば左の如し

品種名	播種期	發芽期	抽穗始	出穗期	穂揃期	收穫期	草丈	穂長	芒長	開長	其の二升の重量	反當收量	反當稈重量
白米	十月十番	十一月十六日	四月廿六日	五月二日	五月六日	六月八日	三、〇五	一、五七	一、九七	一、九三	三、八〇	一、六〇七五	四、五、〇〇
屋根	十一月一日	十一月十七日	四月廿七日	五月二日	五月六日	六月八日	二、八〇	一、七四	二、二二	二、一四	三、九〇	一、三五八九	—
改良	十一月一日	十一月十六日	四月廿七日	五月二日	五月六日	六月八日	二、七三	一、七八	二、三五	二、二三	三、九八	一、七三八八	二、七、〇〇
仁多	十一月一日	十一月十六日	四月廿七日	五月二日	五月六日	六月八日	二、六三	一、八〇	二、一五	二、一〇	三、七一	一、六二五三	—

丹波白稜	十一月一日	十一月十七日	四月廿六日	五月二日	五月六日	六月八日	二、六八	一、六四	二、三七	二、四二	三、八九	一、三五三四	—
借錢切	十一月十四日	十一月十六日	四月廿九日	五月四日	五月七日	六月八日	三、七四	三、二七	二、四五	一、九二	三、七六	一、五六一一	—

右之成績に依れば改良麥の收量尤も多くして一石七斗三升八合八勺を得、仁多、白米麥、借錢切、屋根稜之れに順次し丹波白稜收量尤も少なし
 尙累年試験成績を示せば左の如し

品種名	明治四十年	明治四十年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正元年	大正二年	大正三年	平均	收量順
白米	一、六九四	一、五五二	一、九〇一	一、六九八	一、三五一	一、八七三	一、六〇七五	一、六〇七五	一、六〇七五	一、六〇七五	六
屋根	一、八二八	一、七八五	一、八九七	一、九二二	一、五〇二	一、九六八	一、六五六六	一、六五六六	一、三五八九	一、七三九八	二
改良	一、九二九	一、五八九	二、〇四六	一、九〇八	一、三九五	一、九六八	一、七三八八	一、七三八八	一、七三八八	一、七九一三	一
仁多	一、九七三	一、五六三	一、九六三	一、五三三	一、四〇一	一、八二六六	一、四六六六	一、四六六六	一、六二五三	一、六六七九	五
丹波白稜	一、〇七三	一、四三四	一、七八三	二、四三二	一、四六九	一、七〇七五	一、六二三七	一、六二三七	一、三五三四	一、六八九八	四
借錢切	〇、七七一	一、七三五	二、〇二六	一、五九三	—	一、七二九九	一、五五三五	一、五五三五	一、五六一一	一、七〇二八	三

右表に示せるが如く累年平均收量に於ても改良麥の收量尤も多くして一石七斗九升一合三勺を得屋根稜之れに次ぎ白米麥は尤も少なし

一、品種豫備試験

總て作物は氣候及土質により其發育に影響を蒙る事至大なり故に用地に於ける良種必ずしも乙地に於て優良種にあらざるを以て當場は縣下及他府縣にて優良と認められたる品種を取寄せ同一管理の下に試作し

各種の性質收量の多寡品質の良否等を調査し以て前項の品種試験に編入し得べき良品種を見出さんが爲めに此試験を行へり
 今其成績を示せば次の如し

品種名	播種期	發芽期	出穂期	穂揃期	收穫期	草丈	穂長	芒長	開張	一升反當量
三月裸	十一月一日	十二月七日	四月廿三日	四月廿七日	五月廿日	三、〇五	一、五五	三、五四	四、三〇	三、六七
增田	十一月一日	十二月六日	五月二日	五月五日	六月八日	二、六一	一、九八	二、一八	二、〇五	三、八三
純白	十一月一日	十二月六日	五月四日	五月九日	六月八日	二、五五	一、七九	二、〇六	二、〇六	三、八七
旭裸	十一月一日	十二月六日	五月一日	五月四日	六月五日	二、九三	一、七八	三、三七	三、一四	三、七六
德治	十一月一日	十二月九日	五月二日	五月五日	六月八日	二、七四	一、五五	二、二一	一、九五	三、七六
金川	十一月一日	十二月廿日	五月三日	五月六日	六月八日	二、九一	一、六八	一、九五	二、〇四	三、七六
鳴門	十一月一日	十二月廿日	五月六日	五月十日	六月八日	二、九〇	一、六五	一、八七	一、九一	三、七三
香川	十一月一日	十二月廿日	五月四日	五月六日	六月八日	二、九六	一、六〇	二、三五	二、六五	三、八二
日本撰	十一月一日	十二月廿日	五月二日	五月五日	六月八日	三、一五	一、七五	一、八九	一、八九	三、七〇
紅梅	十一月一日	十二月廿日	五月一日	五月三日	六月四日	二、八七	二、〇二	三、〇六	二、七五	三、八九
小鱈	十一月一日	十二月廿日	五月一日	五月四日	六月一日	三、〇六	一、五〇	三、四八	五、〇九	三、八七
鎌折	十一月一日	十二月廿日	五月二日	五月二日	六月一日	三、〇三	一、五二	三、七七	四、四四	三、八九
伊勢	十一月一日	十二月廿日	五月一日	五月二日	六月二日	三、二二	二、二四	四、二八	四、〇〇	三、九〇
豐年	十一月一日	十二月廿日	五月一日	五月四日	六月八日	二、八二	一、六七	二、〇九	四、七六	三、七三

右の成績に依れば白珍子の收量尤も多くして一石六斗七升九合七勺を得、於七、白朧、金川撰、旭裸等之れに順じ香川の收量尤も劣れり
 尙累年試験成績を表示すれば左の如し

品種名	明治四十年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正元年	大正二年	大正三年	平均
御前	十一月一日	十二月六日	四月三日	五月三日	六月五日	二、四六	一、二四	一、九六	二、七〇	三、七八
橋倉	十一月一日	十二月六日	五月一日	五月六日	六月八日	二、四七	一、四六	二、二一	二、一九	三、八〇
身上	十一月一日	十二月六日	四月廿日	五月一日	五月廿日	二、六四	一、四四	三、六四	一、八四	三、七〇
笠麥	十一月一日	十二月六日	四月廿日	五月二日	六月二日	二、九二	一、五四	三、六二	四、二七	三、六〇
大粒	十一月一日	十二月六日	四月廿日	五月二日	六月二日	二、五六	一、八五	二、八一	二、九二	三、六八
白珍	十一月一日	十二月六日	五月二日	五月四日	六月五日	二、八五	一、九三	二、二四	一、三八	三、八一
白朧	十一月一日	十二月六日	四月廿日	五月四日	六月三日	三、一一	一、八六	二、九八	二、六五	三、八一
田代	十一月一日	十二月九日	五月六日	五月十日	六月八日	二、八七	一、七四	二、九八	一、七〇	三、八三
於七	十一月一日	十二月九日	四月三日	五月四日	六月四日	三、〇八	一、六五	三、五三	三、五〇	三、八四
豐年	十一月一日	十二月九日	五月二日	五月五日	六月八日	三、〇四	一、六〇	一、八九	一、七〇	三、九四

屋根裸	一四二七八	四〇〇四	二、〇〇〇	三八二四	一、六〇三	三九九	二、〇六九	三九六	一、七〇四	三九二	一、七六〇六	三九四、七	一、七〇八三	三八四〇
金川	一、四九三五	三九〇、八	一、九六八	四〇一四	二、一一八	三九八	一、九九〇	三八九	一、四四六	三九〇	一、八〇三三	三九三、八	一、五二五七	三八八〇
平均	一、四七四二	三八九、四	一、九六八	三九一三	二、〇二八	三九七	一、八七三	三九四	一、五八六	三八七	一、七八五八	三九二、一	一、六四二二	三八五、三

前表の如く前年に比し平均収量に於て一斗二升七勺を増し一升の重量に於ては四匁一分を減せり尙前五ヶ年平均に比すれば平均に於て一斗八升四合六勺を減じ一升の重量に於ては六匁八分輕し故に本年ノ麥作は平年に比し九分六厘の減收を示せり

四、大豆粕施用期試験

肥料は其施用期如何により収量に關係を及ぼすものなり本試験の目的は麥作栽培上大豆粕施用の適期を知らんとするにあり、其の方法及び成績は左の如し

試験の方法

- 一、基肥に大豆粕の全部を施す
- 二、二月中旬に補肥として一回に全部を施す
- 三、基肥及び二月下旬に等分して二回に施す

區別	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正元年	大正二年	大正三年	平均収量	収量順
基肥一回區	一、四〇〇	一、八二三	一、八六八	一、八九三	一、二八四〇	一、八〇六六	一、八五五三	一、七〇三〇	一、七〇三〇	三
補肥一回區	一、四五〇	一、七三三	一、八六七	二、一九三	一、二二二九	二、〇三三四	二、〇二七九	一、七八六三	一、七八六三	一
基肥二回區	一、五〇五	一、九七二	一、九八五	一、九五七	一、二〇二九	一、八六一三	一、九三四三	一、七七三九	一、七七三九	二

右の成績に依れば本年に於ては補肥一回區の収量尤も多くして二石二升七合九勺を得基補二回區之れに次

ぎ基肥一回區最も少なし又七ヶ年平均収量に於て最も収量の多きは補肥一回區にして一石七斗八升六合三勺を得基肥二回區之れに次ぎ基肥一回區最も少なし

五、移植試験

本試験の目的は移植と直播との利害得失を知らんとするにあり

但し移植區は株間五寸にして一株の本数を五本とす、今その成績を示せば左の如し

區別	反當収量	出穂初	穂揃期	收穫期
十一月二十日 第一區 直播 (十一月一日蒔のもの)	二、二四三〇	四月廿三日	五月二日	六月五日
十一月二十日 第二區 移植	一九五八七	四月十九日	四月廿九日	六月四日
十一月廿五日 第三區 直播 (十一月五日蒔のもの)	一、三三三	四月廿七日	五月五日	六月四日
十一月廿五日 第四區 移植	二、一〇九一	四月十九日	五月二日	六月四日
十二月五日 第五區 直播 (十一月十日蒔のもの)	一、五七二四	五月二日	五月八日	六月八日
十二月五日 第六區 移植	二、〇四一〇	四月廿一日	五月二日	六月四日
十二月十五日 第七區 直播 (十一月十日蒔のもの)	一、三二六九	五月五日	五月十五日	六月十二日
十二月十五日 第八區 移植	二、〇四六一	四月廿一日	五月二日	六月四日
十二月十五日 第九區 直播 (十一月五日蒔のもの)	一、一三四四	四月十九日	五月一日	六月五日
十二月十五日 第十區 移植	一、〇四六七	四月十九日	五月一日	六月五日

右の表によれば第一區收量最も多くして二石二斗四升三合を得、第四區、第八區、第六區之れに順次し第十區の收量最も少なし之れを要するに移植區は常に直播區より收量多く殊に播種期の遅るゝに従ひ其の差甚だしきものゝ如し、尙試験を續行して確報する處あるべし

六、移植株間對本數試験

本試験の目的は麥を移植するに際し適當なる株間及一株の本數を知らんとするにあり、今其の試験成績を掲ぐれば左の如し

附記 本試験に供せし改良麥は十月十日播種し、十二月四日移植せり

區	別	出 穂 初	穂 揃 期	收 穫 期	反 當 收 量
株間五寸	第一區	四月廿三日	五月二日	六月五日	一、九七九
	第二區	四月廿一日	五月二日	六月五日	二、〇六三
株間七寸	第三區	四月廿一日	五月三日	六月五日	一、八一三
	第四區	四月廿一日	五月二日	六月四日	一、〇〇三
	第五區	四月十九日	五月二日	六月四日	一、三七八
株間一尺	第六區	四月十九日	五月三日	六月四日	一、六〇六
	第七區	四月廿一日	五月二日	六月四日	一、六八五

右の成績によれば第二區の收量最も多くし二石〇斗六升九合三勺を得、第四區、第一區、第三區之れに次ぎ第七區の收量最も少なし之れを要するに第五區及七區を除く外株間同様なる時は一株の本數多きもの程收量多き傾向あり、更に前表により一株の本數と株間の關係を示せば左表の如く第五區を除くの外一株

の本數同様なる時は株間の近かきもの程收量多きが如し故に移植に際しては株間を近かくして一株の本數を多くするに利益あるものゝ如し尙は試験の上確報せん

區	別	反 當 收 量
三 本	區 株	一、九七九
	株 株	一、八一三
五 本	區 株	二、〇六三
	株 株	二、〇〇三
七 本	區 株	一、六〇六
	株 株	一、三七八
七 本	區 株	一、六八五
	株 株	一、六八五

七、堆肥の熟度に關する試験

堆肥は其熟度如何により裸麥の發育及收量に如何なる關係を及ぼすやを知らんが爲新鮮中熟腐熟の三區に別ち試験を施行せしに中熟區の成績良好なりし

八、石灰窒素肥効試験

麥栽培上石灰窒素の肥効を知らんが爲左記方法により繼續試験を行ひしも本年は病害其他の事項により其成績不明ナルヲ以テ發表せず

第一區	硫酸アンモニヤ 過燐酸石里	第二區	硫酸アンモニヤ 過燐酸石里
第三區	石燐酸 過燐酸石里	第四區	石燐酸 過燐酸石里
第五區	智利燐酸 過燐酸石里	第六區	智利燐酸 過燐酸石里

九、型ノ分離試験

當場に於ては從來試験の結果有望と認めたる改良麥(裸麥)及大政官(大麥)に就き優良基本種を撰出せんが爲純系栽培を行ひし其成績を發表するに至らず

一〇、深耕對施肥量試験

耕鋤の深淺及び施肥量の多少により麥の收量に如何なる關係を及ぼすやを知らんが爲左記方法により試験を施行せし其成績未だ判然せず

普通耕	第一區	普通肥料	普通耕より壹寸深耕	第四區	普通肥料
耕	第二區	肥料一割増		第五區	肥料一割増
	第三區	肥料二割増		第六區	肥料二割増

普通耕より二寸深耕	第七區	普通肥料
	第八區	肥料一割増
	第九區	肥料二割増

乙、大麥之部

大麥の耕種法中左記の外裸麥と同一なるを以て省略す

- 一、撰種比重 一、一五の苦鹽汁にて撰種せり
- 一、播種量 一反歩六升の割
- 一、播種期 十二月二日

一、品種試験

本試験の目的は從來本場の成績により優良と認めたる左の品種につき適應の耕作を施し其の特性を充分發揮せしめ以て縣下の風土に適し且つ收量多く品質の良好なるものを見出さんとするにあり其の成績左の如し

(一)本年度の成績

品種名	播種期	發芽期	抽穂初	出穂期	穂揃期	收穫期	草丈	穂長	芒長	芒開長	一升反當重量	一升反當收量
大政官	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月八日	五月廿日	六月十五日	三、四七二	二、二二五	四、一八	二、八三	二、九〇	二、五七九
倍取	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月一日	五月五日	六月五日	二、七三二	一、一五	三、一七	二、八〇	三、一三	二、六〇七
六角シヅワリ	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月六日	五月十日	六月五日	三、四五一	二、二二	四、二四	二、八八	三、〇九	二、二七八

(二)累年度の成績

品種名	播種期	發芽期	出穂期	穂揃期	收穫期	稈長	穂長	芒長	芒開長	一升反當重量	一升反當收量
大政官	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	四月廿日	五月廿日	三、一七〇	一、八六	四、二六	三、六〇	三、二一	二、四八九
倍取	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月廿日	六月十日	三、八八四	二、〇六	四、四八	三、七八	三、一六	二、〇〇〇
六角シヅワリ	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月廿日	六月十日	三、四五二	二、〇四	四、四二	二、六七	二、八三	二、六二四

右の表によれば本年度の收量に於ては倍取の收量最も多くして二石六斗一升七勺を得、大政官之れに次ぎ六角シヅワリ最も少なし、又累年平均收量に於ては六角シヅワリの收量最も多くして二石八斗六升二合七勺を得、大政官之れに次ぎ倍取最も少なし

二、品種豫備試験

本試験は裸麥と同様の目的を以て行ひ優良品種を検出せんとするにあり、其試験成績は次の如し

品種名	播種期	發芽期	出穂期	穂揃期	收穫期	稈長	穂長	芒長	芒開長	一升反當重量	一升反當收量
金子メロ	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	四月廿日	五月廿日	三、一七〇	一、八六	四、二六	三、六〇	三、二一	二、四八九
テールテンメロン	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月廿日	六月十日	三、八八四	二、〇六	四、四八	三、七八	三、一六	二、〇〇〇
ターチット	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月廿日	六月十日	三、四五二	二、〇四	四、四二	二、六七	二、八三	二、六二四
獨逸春	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月廿日	六月十日	三、六三六	二、四八	三、八七	二、七九	二、六七	二、三二〇
池林	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月廿日	六月十日	三、四一三	一、三六	三、五四	三、三三	三、一六	一、八六七〇
薄皮	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月廿日	六月十日	三、三三	一、四六	三、三三	三、一五	三、三三	一、八九一五
茸柄	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月廿日	六月十日	三、一三	一、四〇	三、三三	三、四八	三、三〇	一、七一五
穂柄	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月廿日	六月十日	三、二〇九	一、四一	一、八二	二、二九	三、一七	一、九五五八
芒長	十二月二日	十二月廿日	四月廿日	五月廿日	六月十日	三、二三四	一、八四	二、一三	一、六二	三、一五	一、七七七七

品 種 名	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正元年	大正二年	大正三年	平均收量
金子ゴールデンメロン	一、六二九	一、五三三	一、六七九	一、九七九	一、五四〇	一、六九五	一、四八九〇	一、六三一五	一、六三一五
ゴールデンメロン	一、八三六	二、〇五三	二、四〇一	二、八八〇	二、一九〇八	二、〇〇三六	二、〇〇〇〇	二、一四三四	二、一四三四
ター子ツト	二、五三三	二、四四四	二、四一〇	三、七二六	三、四四一	二、六四五四	二、三三三〇	二、七四七九	二、七四七九
千石	二月二日	五月九日	五月五日	五月八日	六月八日	三、二二〇	一、六六六	二、三〇〇	一、七八〇五
半芒	二月二日	五月廿日	五月二日	五月五日	六月四日	三、三〇〇	一、八八三	一、七四〇	一、七〇一
三重	二月二日	五月廿日	五月五日	五月五日	六月四日	二、四八八	一、二六六	一、四四五	一、三三三
ノゲ	二月二日	五月廿日	五月二日	五月二日	六月三日	二、二七三	一、一八八	一、三三七	一、七三五七
命つなぎ	二月二日	五月廿日	五月八日	五月八日	六月八日	三、一九四	一、一八〇	二、三三〇	一、八四二九
米なかせ	二月二日	五月廿日	五月二日	五月二日	六月五日	二、三八五	一、二八	二、五五〇	一、九五四三
坊主	二月二日	五月廿日	五月二日	五月二日	六月五日	二、三二七	一、三六	二、六五〇	二、〇〇〇
交野	二月二日	五月廿日	五月二日	五月二日	六月四日	二、四八九	一、三四	二、五四〇	一、八五三〇
五畝四石	二月二日	五月廿日	五月二日	五月二日	六月四日	二、九一八	一、七四	二、二五〇	一、八二八五
改良大麥	二月二日	五月廿日	五月八日	五月八日	六月四日	二、六六三	一、三八	二、二二八	二、二八七九
大維四〇號三日月	二月二日	五月廿日	五月六日	五月六日	六月四日	三、一五	一、九三	三、〇〇一	二、七〇〇九
ゴールデンメロン	二月二日	五月廿日	五月卅日	五月卅日	六月一日	三、一五	一、九三	三、〇〇一	二、七〇〇九
大維三五號四三ツ	二月二日	五月廿日	五月卅日	五月卅日	六月一日	三、一五	一、九三	三、〇〇一	二、七〇〇九
ナタレイフヒ	二月二日	五月廿日	五月卅日	五月卅日	六月一日	三、一五	一、九三	三、〇〇一	二、七〇〇九

右の成績によれば「ターネット」の收量最も多くして二石三斗二升二合を得、獨乙春蒔半芒米なかせ、ゴールデンメロン等之れに順次し五畝四石の收量最も少なし

獨乙春蒔	池林	薄皮	葎柄	穗長	芒石	千石	半芒	三重	芒落	命ツナ	米なかせ	坊主
二、三九三	二、一四四	一、七三四	二、一八五	一、七九三	二、二二五	二、〇九四	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二
二、一五六	一、八一六	一、九五五	二、一九九	二、一九二	二、〇九四	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二
三、六七三	二、二五〇	二、四六〇	二、四三三	二、五六一	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二
四、四〇七	二、七四六	二、五二四	二、八七七	二、八〇九	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二
二、九四〇	二、五九四	二、〇五八	二、二七四	二、四七九	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二
二、一九四七	二、〇三七七	二、三三三	二、三三三	二、三三三	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二
二、二六一四	一、八六〇	一、八九五	一、七五一	一、九五八	一、七八〇五	一、七八〇五	一、七八〇五	一、七八〇五	一、七八〇五	一、七八〇五	一、七八〇五	一、七八〇五
二、八五九三	二、二〇七	二、一三七	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二	二、二九二

右の表に依れば累年平均に於ては獨乙春蒔の收量最も多くして二石八斗五升九合三勺を得、ターネット、三重、葎柄、穗長、半芒、芒石、池林等之れに順次し金子ゴールデンメロンの收量最も少なし

丙、小麥之部

小麥の耕種法は裸麥と同様なるを以て之れを省略す

一、品種試験

本試験の目的は従來常場の成績により優良と認めたる左の四品種に付き適應の耕作を施し且つ收量多く品質の良好なるものを檢出せんとするにあり、其成績左の如し

品種名	播種期	發芽期	抽穂初	出穂期	穂揃期	收穫期	一升の重量	反當	稈長	穂長	芒長	芒開長	重量	反當
筑摩	十月廿四日	十二月八日	五月四日	五月六日	五月八日	六月十三日	三六八	一、七五八	三、二二	二、三三	一、六六	一、四八	一、九四九	一、四八
シヅア	十月廿四日	十二月八日	五月四日	五月七日	五月十日	六月十四日	三七二	一、四九五	三、二四	二、五六	ナシ	ナシ	一、四九五	一、四八
相州	十月廿四日	十二月八日	五月六日	五月八日	五月十日	六月十三日	三五三	一、六一七	三、八二	二、五三	一、六五	一、二四	一、四九五	一、四八
寶滿	十月廿四日	十二月八日	五月八日	五月十日	五月十二日	六月十五日	三五四	一、六〇一	三、八九	二、三三	ナシ	ナシ	一、四九五	一、四八

右の成績に依れば筑摩の收量尤も多くして一石七斗五升八合一勺を得、相川、寶滿之れに順次しシヅアリの收量尤も劣れり、尙累年成績を示せば次の如し

品種名	明治三十九年	明治四十年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正元年	大正二年	大正三年	平均收量
筑摩	一、八二六	一、六四二	一、八九一	二、〇三三	二、〇三八	一、九三六	二、一八三	一、八〇九	一、四七六	一、四七五	一、七九三
シヅア	一、八五八	一、六六一	一、五五三	一、四八一	二、一〇四	一、二八六	二、一八九	一、五七九	一、四七六	一、四七五	一、六八六
相州	一、七二二	一、八七五	二、〇七六	二、一三三	二、一九三	一、九六二	一、九四三	一、四七三	一、四九二	一、六〇一	一、八七八

右の成績に依れば收量尤も多き品種は筑摩にして一石九斗四升九合五勺を得、寶滿、シヅアリ之れに順次し最も劣等なるは相州なり

一、品種豫備試験

本試験は裸麥、大麥の豫備試験と全様の目的を以て優良品種を撰出せんとするにあり、其の試験成績は次の如し

品種名	播種期	發芽期	出穂期	出穂揃	收穫期	稈長	穂長	芒長	芒開長	重量	反當
砂川達磨	十月廿四日	十二月九日	五月十日	五月十五日	六月十五日	三、九八	二、二二	一、七六	一、二二	三、五三	一、五五八
達磨	十月廿四日	十二月九日	五月十日	五月十五日	六月十五日	三、〇一	二、二四	一、六八	一、一五	三、七七	一、四七七
タカセン	十月廿四日	十二月九日	五月十日	五月十五日	六月十四日	三、〇二	二、二五	一、七七	一、五五	三、五七	一、五五八
新田早生	十月廿四日	十二月九日	五月四日	五月六日	六月十日	三、二四	二、一七	一、六五	一、三六	三、七四	一、五五八
伊賀筑後	十月廿四日	十二月九日	五月五日	五月七日	六月十日	三、二八	二、一九	一、四八	一、五四	三、六五	一、六二九
軍配	十月廿四日	十二月十日	五月八日	五月十日	六月十四日	三、五五	二、二二	一、七七	一、二二	三、七四	一、五五九
チコ	十月廿四日	十二月十日	五月十日	五月十日	六月十四日	三、八八	二、二三	一、八五	一、二二	三、四二	一、五五九
岩手	十月廿四日	十二月十日	五月十日	五月十日	六月十四日	四、二五	三、三八	一、四六	一、二二	三、四〇	一、五五九
保津	十月廿四日	十二月十日	五月十日	五月十日	六月十四日	三、八〇	二、一九	一、四六	一、二二	三、六五	一、五五九
穂手	十月廿四日	十二月十日	五月十日	五月十日	六月十四日	三、七九	二、四六	一、三七	一、二二	三、四三	一、五五九
本	十月廿四日	十二月十日	五月十日	五月十日	六月十四日	三、七七	二、〇八	一、四八	一、二二	三、六三	一、五五九
熊	十月廿四日	十二月十日	五月十日	五月十日	六月十四日	三、八六	三、三五	一、〇六	一、二二	三、三一	一、五五九

赤團子	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、六七	二、三二	〇、九	三、三三	一、四三三
グルグツトチャフ	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、三二	二、九二	一、二	三、六九	一、六三六
相州(群馬縣) 梶	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、九八	二、〇一	一、四	三、四七	一、四三三
相州(群馬縣)	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、九四	二、四一	三、九	三、五七	一、三七八
關州(静岡縣)	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、八三	二、八五	一、七八	三、七〇	一、六三二
萬州	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、八七	二、五五	三、一	三、六六	一、四〇三
金州	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、九三	二、〇九	四、七	三、七〇	一、五六七
早生坊主	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、三三	二、二六	一、六二	三、五五	一、六三九
西勝村	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、八二	二、六二	一、二八	三、六三	一、五四二
優勝	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	四、〇七	二、〇六	一、八九	三、八六	一、五四〇
若林	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、〇一	二、八九	二、二	三、四〇	一、三九八
三尺小麥	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、〇一	二、二四	一、五	三、六九	一、七五〇
白小麥	十月廿日	十月十日	五月十日	五月十日	五月十五日	六月十四日	六月十四日	三、八五	二、八三	一、六二	三、五五	一、〇八九

右の成績に依れば三尺小麥の收量尤も多くして一石七斗五升〇三勺を得、金玉、グルグルトチャフ、相州(静岡縣)、伊賀筑後等之れに次ぎ白小麥の收量尤も劣れり、尙累年成績を表示すれば次の如し

品 種 名	明治四十年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正元年	大正二年	大正三年	平 均
砂川達摩	二、三四五	一、九三六	一、三二〇	一、八三〇	二、二二二	一、七七一	一、四六八	一、五五八	一、七九二	一、七九二

達摩	二、一三六	一、七三二	二、一九九	一、八七五	一、六八八	二、〇五七	一、五〇二	一、四七七	一、七〇七
タカセ	二、〇三九	二、一三七	二、〇九〇	一、七一一	一、四九二	一、九七一	一、六〇四	一、五五八	一、八二五〇
新田早生	一、八五六	二、〇〇五	一、八九三	一、五五六	一、八〇四	二、〇三三	一、五三二	一、五三九	一、三五八二
伊賀筑後	二、三三三	二、一一一	一、九三三	一、八八八	一、九四〇	一、五八五	一、七一八〇	一、六二一九	一、八三七七
軍配	二、〇八六	一、七九四	二、一〇三	一、八〇〇	一、七六一	一、六〇二	一、四九七	一、二二九	一、七五四
穂長	一、六九七	一、八五七	一、九九〇	一、七七〇	一、四九六	一、七一一	一、三三三	一、三三〇	一、六七八九
保津	二、一六八	一、六九一	一、九一一	一、六六四	一、六八八	一、五七八	一、二五五六	一、三四五〇	一、六六二八
穂本	二、二六七	一、九八九	二、〇七八	一、七二六	一、五二四	二、二四〇	一、五四四	一、四五四	一、八四〇
赤子	二、三三三	二、〇二六	二、二二四	一、八七八	一、八二五	一、九〇二	一、二二七	一、五一六	一、八六四
金團	二、三〇一	一、八七四	二、〇五六	一、八七七	一、四四六	二、一三三	一、二二九	一、四三三	一、七六五〇
ベルベツトチャフ	二、二八二	一、八六四	一、七九九	一、六四九	一、六一八	一、九三〇	一、四八二	一、四三三	一、七六五二
相州(群馬縣)	一、七六三	一、七六三	一、八八三	一、八四六	一、四四一	一、八八六	一、六三三	一、六三三	一、八八六
相州(静岡縣)	一、七四九	一、八四七	一、七一一	一、七八四	一、二七一	二、二四七	一、三二一	一、三七八	一、六三八
關州	一、八五六	一、七九一	一、八五四	一、六三五	一、四二七	一、八〇二	一、五三二	一、四〇三	一、六六二
萬州	一、八五六	一、七九一	一、八五四	一、六三五	一、四二七	一、八〇二	一、五三二	一、四〇三	一、六六二
金州	一、八五六	一、七九一	一、八五四	一、六三五	一、四二七	一、八〇二	一、五三二	一、四〇三	一、六六二
早生坊主	一、八五六	一、七九一	一、八五四	一、六三五	一、四二七	一、八〇二	一、五三二	一、四〇三	一、六六二

小雜六號白小麥オレゴン	五月九日	六月十日	三五九八	二、七八〇	二、五五〇	一、二二六七	一、〇二六七
小雜二六號白小麥白姫	五月十日	六月十三日	三、九七九	三、四一〇	一、二〇〇	一、三八六七	一、三八六七
小雜二四號十條フロン	五月十日	六月十日	三、六四三	二、六七〇	二、三三〇	〇、九三九〇	〇、九三九〇
小雜九號伊賀筑後オレゴン	五月十三日	六月十四日	三、五七〇	三、三三〇	〇、四三五	一、一七六四	一、一七六四

右の成績によれば本年度に於て收量最も多きは(四)十條佛二六號にして一石九斗六合九勺を得(二)伊賀筑後オレゴン(九)穂揃オレゴン五斗小麥オレゴン等これに順次し最も收量少なきは小雜二四號十條フロンなり尙累年平均に於ては白小麥カリホルニヤの收量最も多くして一石七斗一升八合七勺を得(二)伊賀筑後オレゴン之れに次ぎ最も少なきは八斗小麥白姫なり

四、播種期試験

本試験の目的は播種期の早晚は小麥の成育に如何なる影響を及ぼすかを試験し以て適當なる播種期を知らんとするにあり、今その成績を擧ぐれば左の如し

番號	區 別	發芽期	發芽 狀況	出穂初	出穂期	穂揃期	黃熟期	收穫期	稈長	穂長	一升重量	反當收量
1	十一月月上旬 (十一月十日早種)	十一月七日	良好	四月廿日	四月廿日	五月四日	六月十日	六月十日	三、二二	二、二七	三、六八	二、三〇四
2	十一月月中旬 (十一月二十日)	十一月四日	良好	五月二日	五月五日	五月九日	六月十三日	六月十三日	三、〇五	二、三四	三、七一	一、八一三
3	十一月下旬 (十一月三十日)	十一月廿日	良好	五月三日	五月八日	五月十二日	六月十三日	六月十三日	二、九四	二、三八	三、六五	一、六二六

附記 供試用品種筑摩
右の成績によれば一升の重量に於ては十一月二十日蒔きのもの最も重くして三百七十一匁、十一月月上旬

蒔きものこれに次ぎ十一月下旬蒔きのもの最も軽し反當收量に於ては十一月月上旬のもの最も多くして二石一斗三升四勺を得、十一月月中旬蒔きものこれに次ぎ十一月下旬のもの最も少なしこれによつてこれを見れば小麥と裸麥と同様早蒔とすることを可とす

四、肥料用量試験

小麥栽培上適當なる施肥量を知らんが爲本試験を施行せり其成績次の如し

區 別	出 穂 期	穂 揃 期	收 穫 期	一升重量	反當收量	反當稿量
標準區	五月十二日	五月十七日	六月十五日	三、五〇	一、六五九四	七、一〇〇
一割増	五月十二日	五月十七日	六月十五日	三、九五	一、七六七〇	八、一六〇〇
一割減	五月十二日	五月十七日	六月十五日	三、四九	一、五二八〇	五、三三〇〇

右の成績によれば一割増區の收量最も多く且つ一升の重量も重くして肥料の減するに従ひ收量及び一升重量を減せり、尙ほ試験を繼續して確報せん

終

